

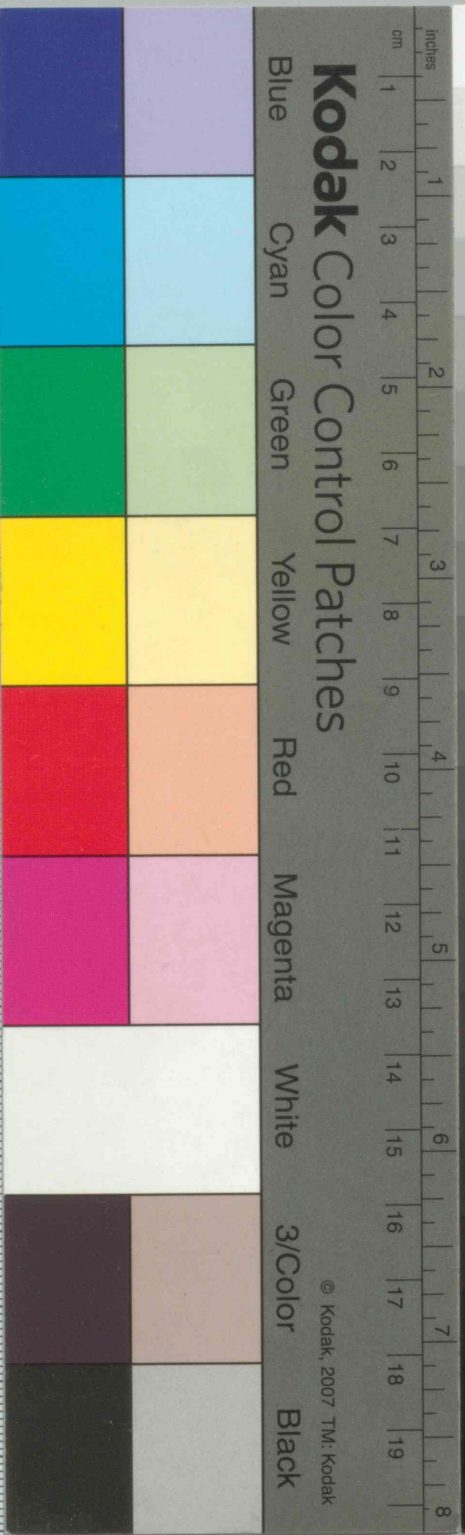
ほのごのこ

375.9
Shi14
資料室

文部省検定済教科書



2



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

50540

50540

教科書文庫

5

810

34-1948

200030
1.635

資料室

395-9
Shi 14

鳥島大學圖書



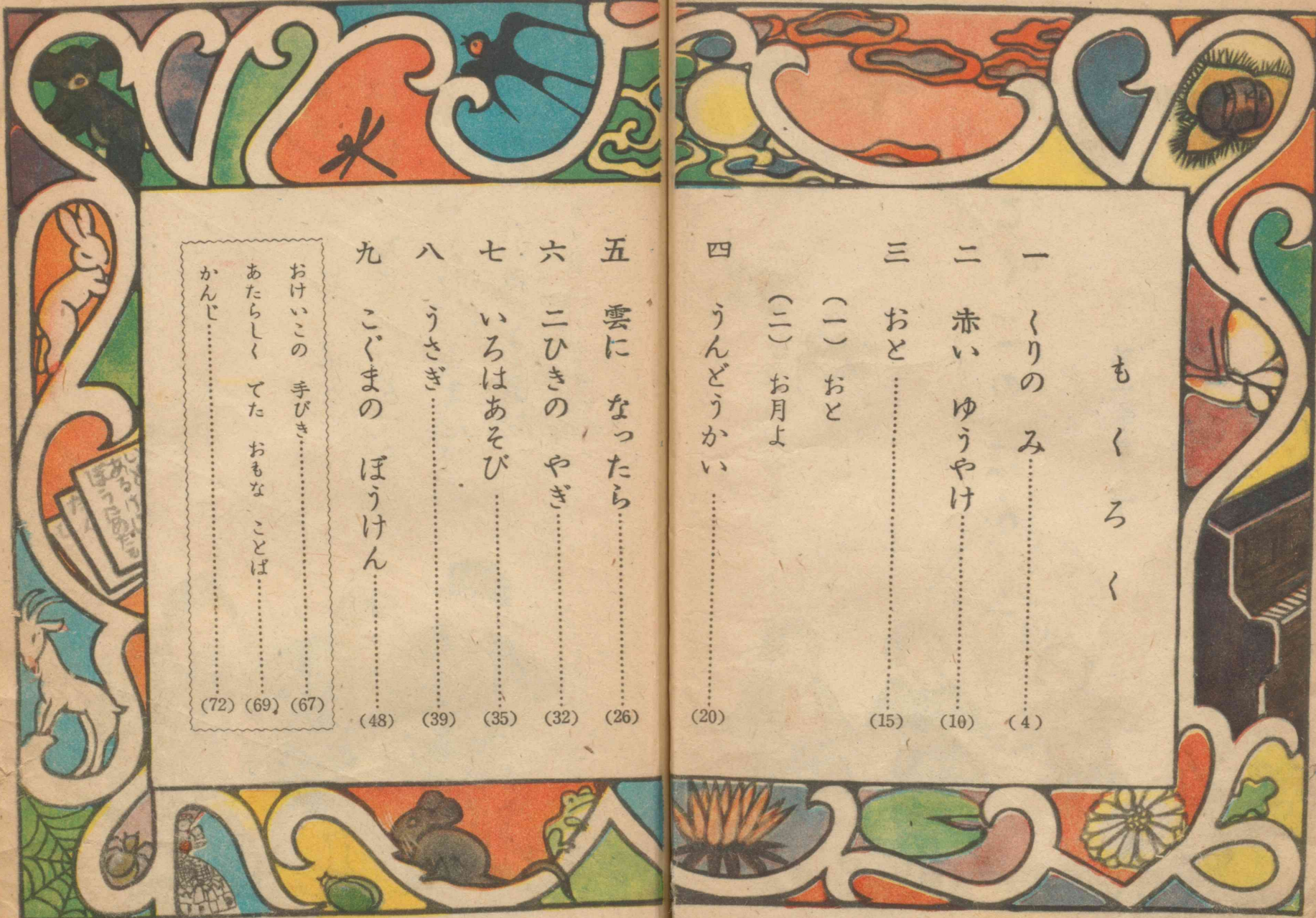
昭和二十三年八月十五日
文部省検定済
小学校国語科用



こくごのほん
二

第一学年下





もくろく

一 くりのみ (4)

二 赤い ゆうやけ (10)

三 おと (15)

(一) おと

(二) お月よ

四 うんどうかい (20)

五 雲に なったら (26)

六 ニひきの やぎ (32)

七 いろはあそび (35)

八 うさぎ (39)

九 こぐまの ぼうけん (48)

おけいこの 手びき (67)

あたらしく てた おもな ことば (69)

かんじ (72)

— くりの み

ひろし「くりの みが。」

しみげるお「おちて いる。」

ひろし「いがの ままだ。」

しみげるお「いがの ままだ。」



ひろし「くりの みが。」

しみげるお「のぞいてる。」

ひろし「いがの なかから。」

しみげるお「いがの なかから。」

ひろし「くりの みを。」

しみげるお「かぞえて みよう。」

ひろし「一つ、二つ、三つ。」





ひるし「くりの みが。」
 しみけるお「えだから おちる とき。」
 ひるし「くりの みは。」
 しみけるお「くりの みは。」



ひるし「くりの みは。」
 ひみろしお「いがの なかだ。」
 ひるし「だきあって いる。」
 ひみろしお「だきあって いる。」

しみけるお「一つ、二つ、三つ。」

ひろし「いつまでも はなれまいと。」

みつお「かたく。」

しげる「つよく。」

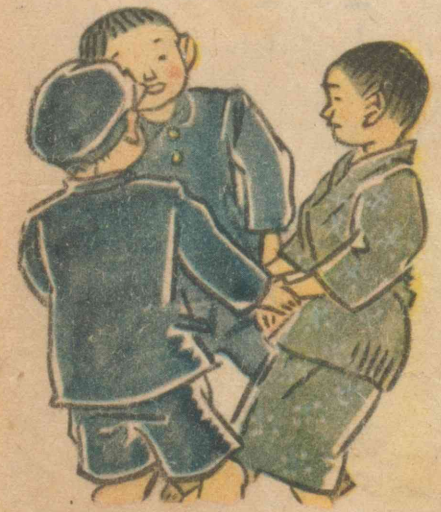
ひろし「やくそく したに ちがいない。」

しみげお「そうだ。やくそく し」

たのだ。

ひろし「くりの みが。」

みつお「三つ ならんで。」



しげる「なかよした。」

みんな「なかよした。」

ひろし「くりの みを。」

みつお「三つ ならべて。」

しげる「秋の 日は あたたかい。」

みんな「秋の 日は あたたかい。」



二 赤い ゆうやけ



はげいとうの 赤い はに、赤い とんぼが 一ぴき
とまって、やすんで いました。

ひとりの 子どもが、それを みつけて、こっそりと
ちかよって きて、とんぼの しっぽを つかまえま
した。

ふうふうと、とんぼは はねを ならしましたが、も
う もう まに あいませんでした。子どもは はねに
手を かけながら、にわから こえを かけました。

「おかあさん、いと ちょうだい。」

おかあさんが えんに でて きて、子どもに いと
を くれました。とんぼは いとに つながれました。

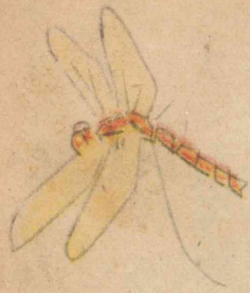
子どもは いとを ゆびに まきつけて、とおりの
ほうへ でて いきました。子どもたちが、おおぜい
あつまって あそんで いました。

ちょうと まっかな ゆうやけが、あたまの 上まで



ひろがって いて、いどの
 とんぼと おなじ とんぼ
 が、なんびきも、あかるい
 空を まって いました。
 どの とんぼも、みな、赤
 い ずぼんを はいて い
 ました。はねを のばして、
 いったり きたり して
 いました。
 空の とんぼを ながめ

たり、なかまの 子どもと
 いて、いどの うちに、子どもは
 して、とんぼを にがして しま
 いました。いどの
 からだに いとを つけたまま、
 とんぼは とんで
 きました。



とんぼは、どちらへ
 いったでしょう。空へ
 にげて
 も、いと は からだに ついて
 いました。いどの はしが、
 でんしん
 ばしらの はりがねにでも
 からま
 りついて いないでしょうか。
 もし

そう になったら、どうでしょう。それっきり どこへも
とんでは いかれませんか。よなかになっても、そこに
そう して いるより ほかは ありません。雨が ふ
っても、そこに そう して、ぬれながら いるより
ほかは ありません。

赤い ゆうやけ。

むらでも まちでも、どこへ いても 赤い ゆう
やけ。

こんな とんぼが、まだ 二三びき、どこかに いる
かも しれません。

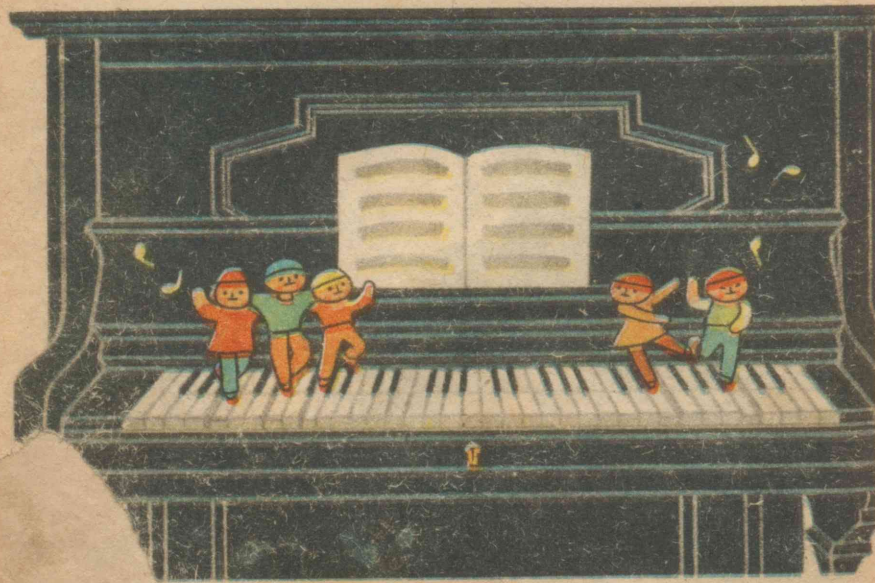
三 おと

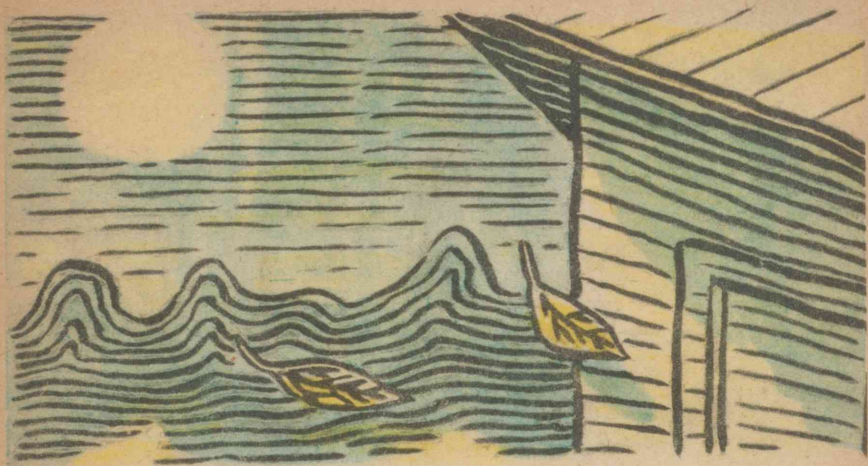
(一) おと

ぼろん。

ぴあのって、

いい おとね。





ぼろん。

ぴあのの おと、
どこへ いくの。

ぼろん。

あの おと、
ちょうだい。



(三) お月よ

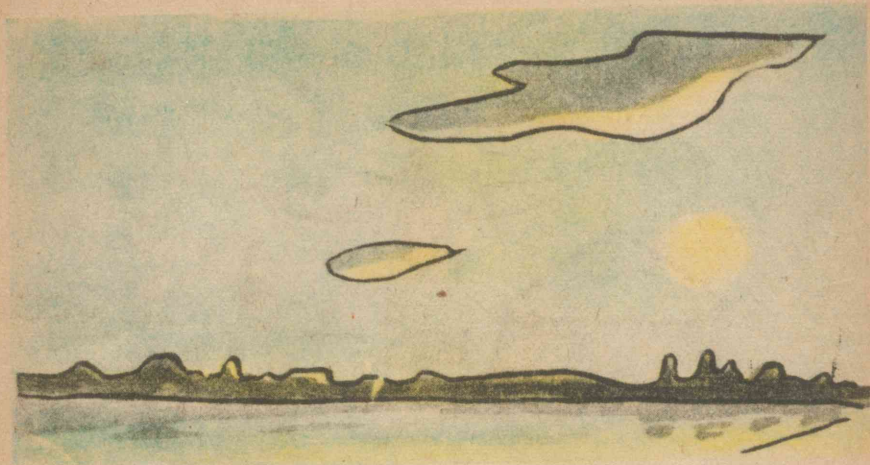
とん、
とん、
とん、

あけて ください。

どなたです。

わたしや 木の はよ。

とん、 ことり。



とん、
とん、
とん、
あけて ください。
どなたです。
月の かげです。
とん、 ことり。



とん、
とん、
とん、
あけて ください。
どなたです。
わたしゃ かげです。
とん、 ことり。

はただ。
目あての

白、き、

赤、青、

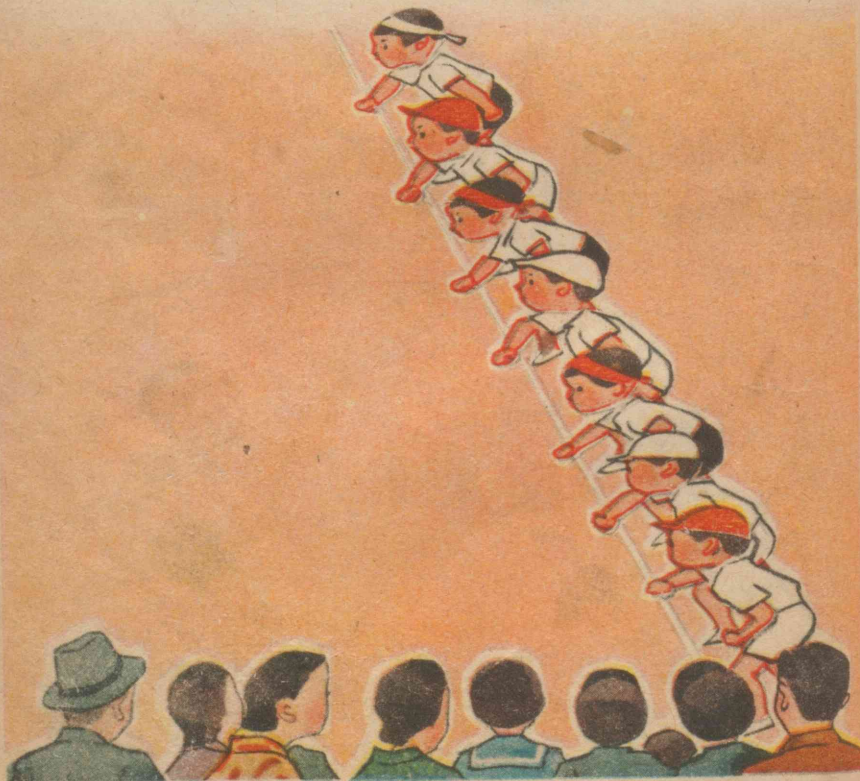
てえぶた。

白い

五十めえとる、

かけるぞ、

くみだ。



ぼくらの

ならんだ

一れつに

がんばるぞ。

よういだ、

ふえた、

ぴいっ。



四 うんどうかい

せんせいだ、
 おかあさんだ、
 ねえさんだ、
 おともだちだ。
 みんな、
 こっちを、
 みて
 いるぞ。



ようい、
 どん。
 かける、
 かける。
 みて いる
 人は、
 もようだ、
 なみだ。



一ちやく、
 二ちやく、
 三ちやく、
 四ちやく、
 はた、はた、
 はた、はた、
 うれしい、
 一ちやくだ。

あ



がんばれ
 わあっ。
 がんばれ
 わあっ。
 五十めえとる、
 そら、
 そら、
 そこだ。

あ





五 雲に なたたら

雲に なたたら、ぼくは、
おうちの やねよりも、火
のみの やぐらよりも、お
ふるやさんの えんとつよ
りも、山の てっぺんより
も ずうっと、ずうっと、
たかい ところへ、あがっ



て いきます。

でも、あまり とおい

ところへは いきません。

いつも、おかあさんが み

える ところから、

「ぼく、ここに いますよ

う。」

と、おかあさんを よびま
す。おかあさんは、きつと、





す。めずらしいものを、
 たくさんみてきて、あ
 とで、おかあさんに、くわ
 しくおはなししてあ
 げます。

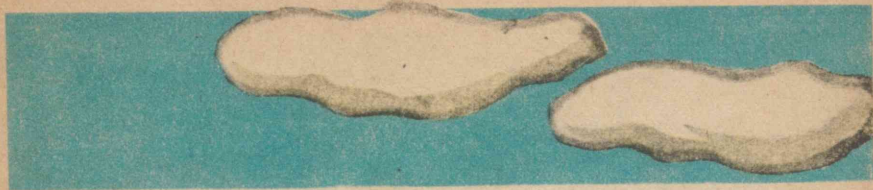
花の つぼみが ひらく
 とき、草や 木や、はたけ
 につくったものがの
 びる とき、



あの やさしい 目で、空
 の 上の ぼくを、みて
 くださるでしょう。

おかあさんが、おしごと
 に むちゅうになつて
 いらっしゃる とき、ぼく
 は、ふうせんのように、ふ
 わり ふわりと、とおい
 ところへ、とんで いきま



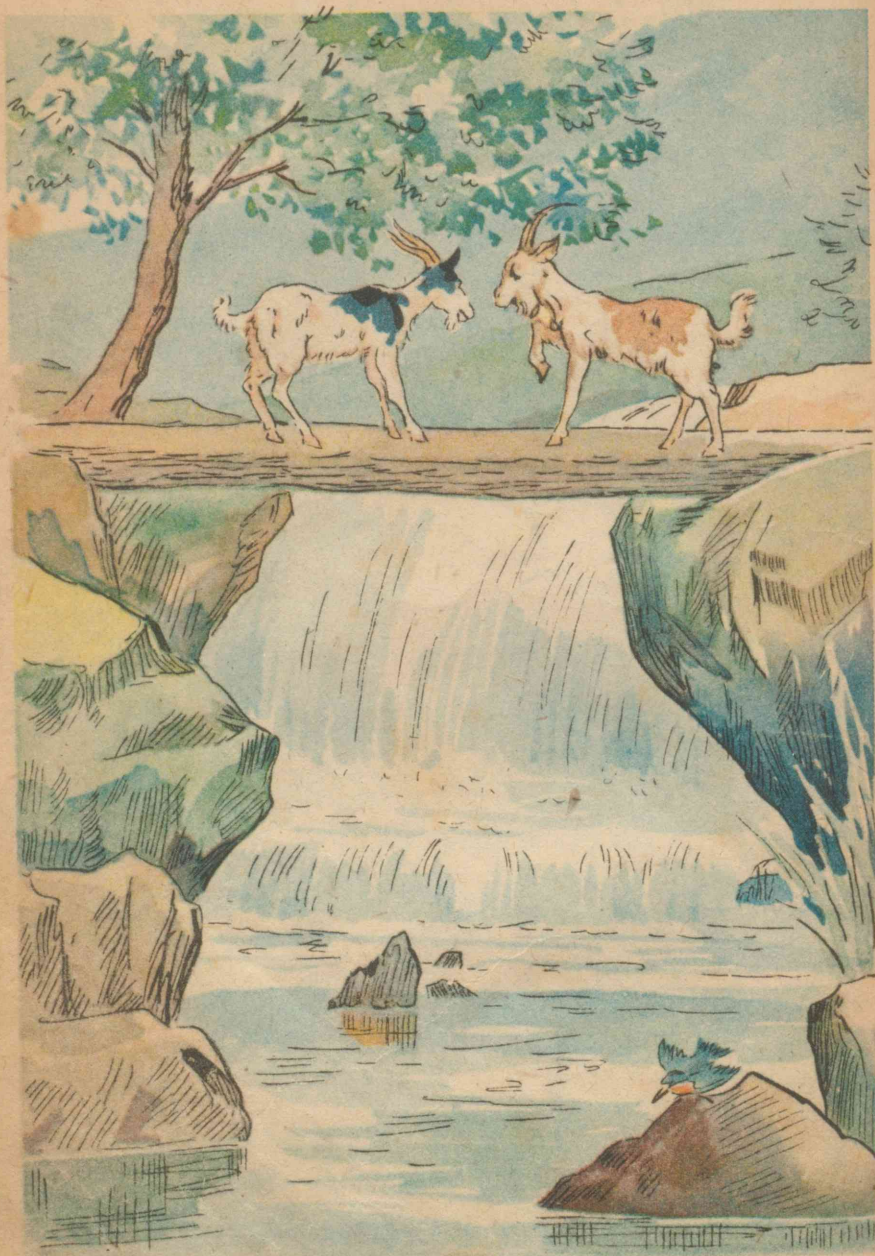


「雨ふりの日は、いやだなあ。」
 というときには、すぐやみます。あおむいて、空をみる。目じるしに、なるだけの、はねのような、白い、きれいな雲になっ
 ています。



「雨がほしい。雨がほしい。」
 となく、かえるのこえをきいたら、すぐそこへ、どっさり雨をふらし
 してあげます。
 でも、たかげたや、じょうぶなくつのない子
 か、





六 二ひきの やぎ

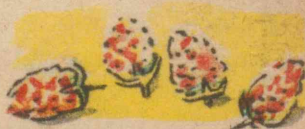
たに川に、まる木ばしが かかって いました。
二ひきの やぎが やって きて、りょうはしから
わたりはじめました。

二ひきの やぎは、はしの まん中で であいました。
「ぼくが さきに わたるんだよ。じゃまだから のい
て くれたまえ。」
「いや、ぼくが さきだよ。きみこそ のいて くれた」



「いのつくものなあに。」
 「いぬ、いえ、いか、いかげやさん、
 いけ、いし、いしやさん、いす、
 いしゃ……」。
 「まだまだあるよ。」
 「いた、いたち、いちば、いちご……」。

七 いろはあそび

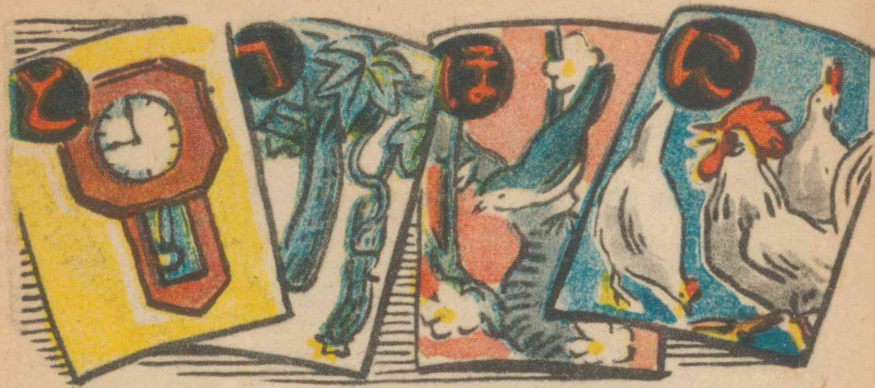


2

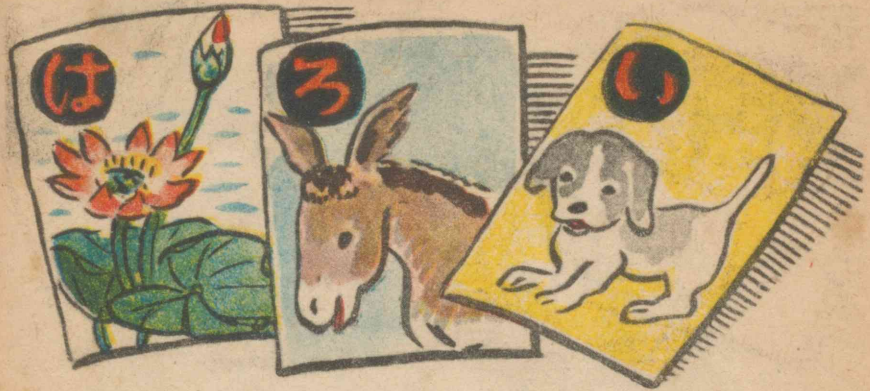
まえ。」
 あぶない はしの上で、
 つのつきあいをはじめま
 した。

ニひきとも 足をすべ
 らして、たに川に、どぶん
 と おちこんで しまいま
 した。

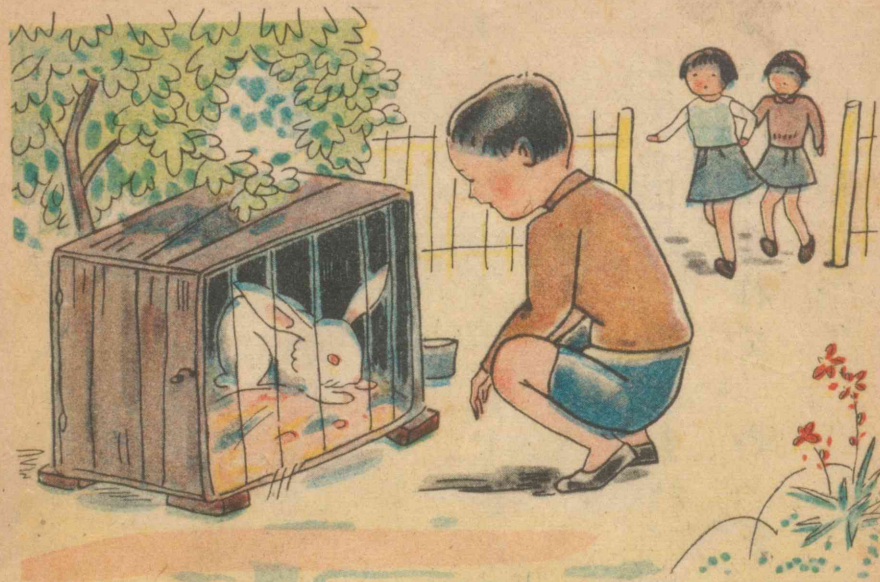




「はい。」
 あきらさんは、かるたの大ききに
 がようしをきりました。それから、
 そのかるたに、ことばをかきはじ
 めました。
 いぬは わんわん。——ろばの みみ
 ながい——はすの花が ひらいた。
 ——にわとり 三ば——ほうほけきよ
 は うぐいす——へちまは ながい。



「どっさり あるよ。いも、いね……。」
 「ねえさん まって。ぼくが いうか
 ら……。いと、いりまめ、いろり、い
 わ、いわし……。」
 「よく かんがえたね。」
 「ねえさん、ぼく、とても いい こ
 とに きがついたよ。」
 「なあに。」
 「いろはがるたを つくろうよ。ぼく
 が ことばを かんがえるから、ね。」



うさぎの はいって い
 る はこの まえで、 あ
 きらさんが しゃがんで
 うさぎを みて います。
 ちよ子さん と みつ子さ
 んが あそびに きまし
 た。

ハ うさぎ

— とけいは 九じだ。
 「なんまい あるか、かぞえて ごらんなさい。」
 「二、四、六、七、七まい あるよ。」
 「いろはにほへとは、いろはうたの はじめですよ。」
 「ねえさん、いろはは うたなの。」
 「うたですよ。」
 「さあ、えを かきますよ。あきらさんも、てつだって
 ちょうだい。できたら、みつ子を いれて、かるたど
 りを しましう。」

ちよ子「あきらさん、なに して いるの。」

あきら「うさぎを みて いるの。とても かわいいよ。」

みて ごらん。」

みっ子「まあ、かわいい こと。この うさぎ、いつ

きたの。」

あきら「きのう、おじさんの うちから もらって き」

たんだよ。」

ちよ子「まだ、子どもね。」

あきら「うまれて やつと 四十日になっただけなりな
んだって。」

みっ子「なまえは、なんと いうの。」

あきら「白いから、ゆき子と つけたのさ。」

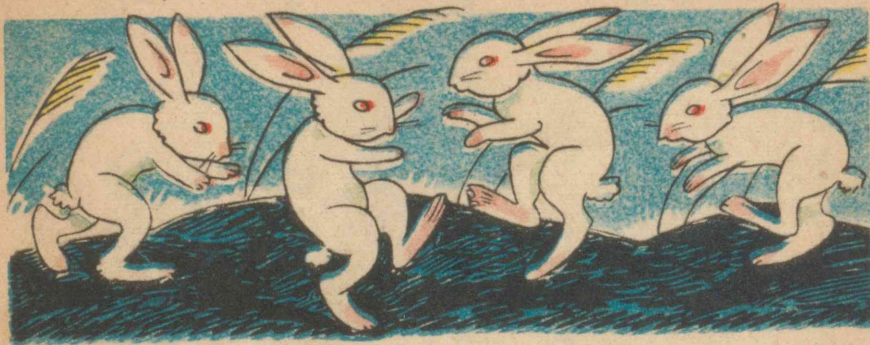
みっ子「からだ が まっ白で、目の ところが まっか
だから、きれいだわ。」

ちよ子「耳の 中も もも色で、きれいだね。あら、耳
を ぴんと たてたわ。」

あきら「ぼくたちの はなしを きいて いるんだね。」

みっ子「うさぎさんに、わたしたちの ことばが わか
るかしら。」

あきら「そりゃあ わかるさ。だって、むかしから、お」



ちよ子 「しらなければ、おしえて あげ
るわね。あなたの ごせんぞは
ぞは——」。

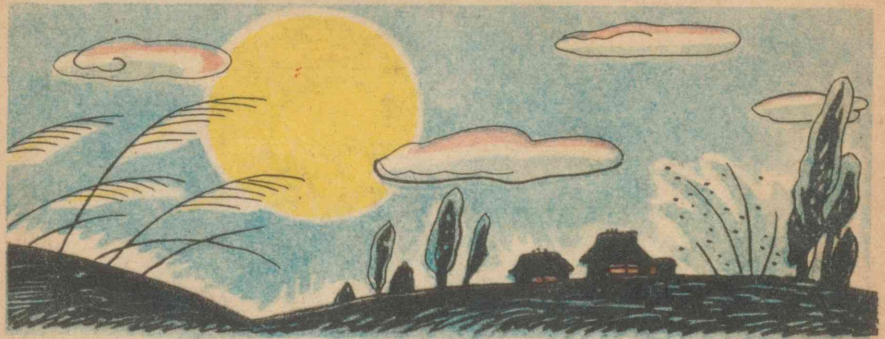
みんな 「お月さまの うさぎ。」

みつ子 「わかったでしょう。」

みんな 「ね、わかったでしょう。」

ちよ子 「お月さまの うさぎさんは、
おどりが とても じょうず
なのよ。」

みつ子 「ゆき子ちゃん、おどりを お



ときばなしにも たくさん
でて きて、 にんげんと は
なしを して いるんだもの。」

ちよ子 「じゃあ、うさぎさんと、おは
なししましうよ。」

あきら 「ああ、しう。」

みつ子 「うさぎの ゆき子ちゃん、あ
なたの ごせんぞは だれか
しって いるの。」

あきら 「しらないの。」

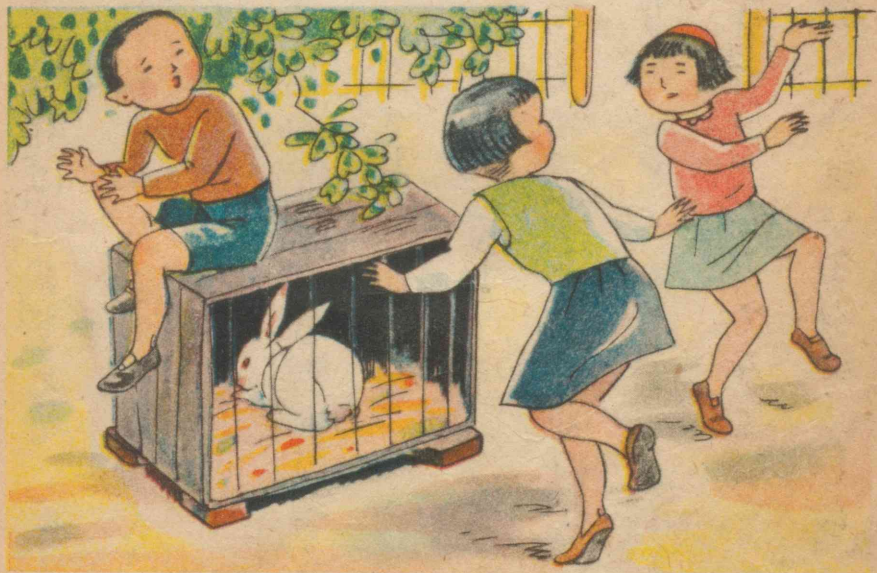
しえて、あげるから、
よくみていてお
ぼえなさいね。」

あきら「ぼくがうたってあ
げよう。」

ちよ子「それではみつ子さん、
おどりましょう。」

あきら「一 二の 三。」

あきらさんがうたって、



ちよ子さんとみつ子さんがおどります。

うさぎ うさぎ、ぴよん ぴよん はねる。

なぜ ぴよん と はねる。 ぴよん ぴよん はねる。

ことしは ほう年 草の み 木の み、

みな ぴよん と はねる。 ぴよん ぴよん はねる。

わたしも いっしょに、ぴよん ぴよん はねる。

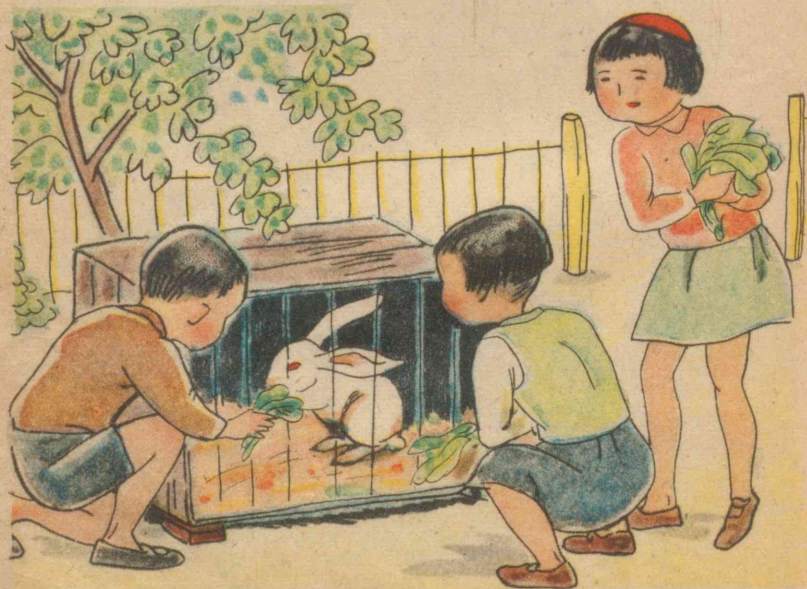
あきら「あら、ゆき子ちゃん、あっちむいてるよ。」

みつ子「この うさぎ、おどりがきれいなのかしら。」

ちよ子「まだ 子どもだから、あきっぱいのよ。」
 あきら「じゃあ、あした また おしえて やらうね。」
 みつ子「ええ、そう しましう。」
 ちよ子「なかよしに なった しるしに、草を やりま
 しょう。」
 みつ子「わたしも やるわ。」

ちよ子さんと みつ子さんは、草を とって や
 ります。

ちよ子「ゆき子ちゃん、な」
 かよしに なりま
 しょうね。」
 みつ子「わたしも なか
 よしに なりまし
 ょうね。」
 あきらさんと みつ子
 さんと ちよ子さんは、
 また 草を とって やります。



九 こぐまの ぼうけん



人の すんで いる ところ 〓
から、ずうっと はなれた と 〓
おい ところに、大きな 山が
ありました。

山には、木や 草や 花が、
たくさん たくさん ありま
した。

でも、ひゅうっと さむい 風が ふいて、それから
ちら ちら ちら、雪が ぶって くと 冬——。

冬が きたのです。
山は 青い きものを ぬいで、
まっ白な きものに きかえま
した。

この 山の おくに、ことし
うまれた かわいい こぐまが
いました。きょうも、たべものを
さがしに いった おかあさんを、





まって いました。

「早く かえれば いいのに。ぼく、さみしいなあ。おかあさ。」

あん。

こぐまは、あなの いらぐちから かおを だして、あたりを みまわしました。いくら みても、

おかあさんの すがたは みえません。

そこには、ただ おかあさんの 足あとだけが、ながくながく むこうの ほうへ つづいて いるだけ。

です。

いくら まっても、おかあさんが かえらないので、

こぐまは、たいそう さみしく なって きました。

いつも、おかあさんは でかける とき、

「ひとりで そとへ でては いけませんよ。おかあさんの かえるまで、じっと まって いるんですよ。」

そう、こぐまに いった でかけるのでした。でも、

いま、こぐまは、あんまり おかあさんの かえりが おそいので、さみしく なって、

「ちょっと ぐらいなら いいだろう。」とおもって、ち



雪で どこも まっ白だ。

こぐまは、あんまり けしきが よいので、びっくり
しました。そのうちに、お日さまが、雲の 中から で

よこ ちょこ、おうちの そと
へ はいだしました。そして、
高い ところへ あがって、そ
の へんを みわたしました。
「うわあい、とても いい け
しきだなあ。むこうの 山も、
こっちの 谷も、雪ばかりだ。

て きました。

「やあ、むこうの 山が、ぎん色に ひかって きたぞ。
あの きれいな 山の むこうには、なにが あるん
だらうなあ。」

こぐまが むちゅうに なって、とおくの 山を な
がめて いると、おしりの 下の 雪が、からだの あ
たたかみで、だんだん とけはじめました。こぐまは、
そんな ことは、ちっとも しりません。

「ぼく、早く 大きく なって、ずっと むこうの ほ
うまで、いって みたいなあ。」

そう 行って、おも
わず、せのびを した
ときです。

「あっ。」

山の上から、つる

つる どしいんー。

こぐまは、ふかい 谷そこへ すべりおちたのです。

「ええん、ええん、ぼく、こんな うすぐらい 谷そこ
で、ひとりぼっちで いるのは いやだよ。ええん、
ええん、ええん。」

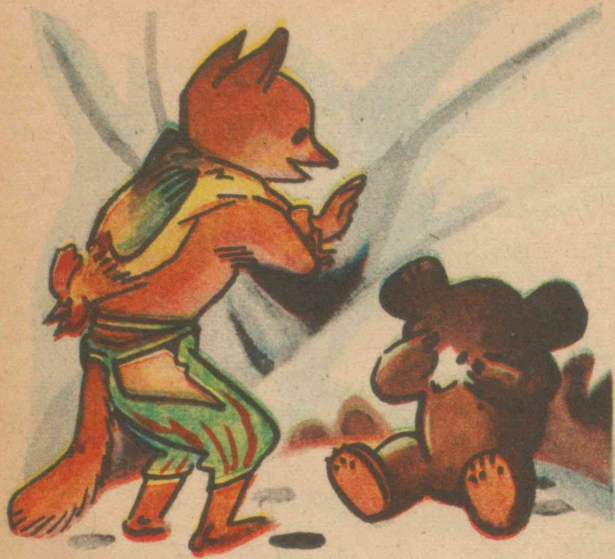


こぐまは、ひとりで なくて いました。
しばらく すると、あたまの 上で、

「これ、これ、どう したの。」
と いう こえが きこえま

した。

みると、一ぴきの きつね
が、なにか かついで 立っ
て いました。
きつねは やさしい こえ
で、



「なに、この 山の 上から
おちたって。なかないでも
いい、なかないでも いい。
ほうれ、こんな ごちそう
があるんだよ。」

きつねの おじさんは、そ
う いった、大きな にわと
りを、こぐまの まえに だ

しました。こぐまが 大よろこびで とろうと すると、
「こら こら、おまえ ひとりに やるんじゃない。わ



たしの うちまで、ついて
おいで。どっさり わけて
あげるよ。
こぐまは、それを きくと、
だまって きつねの あとか
ら ついて いきました。
きつねの うちは、谷そこ
の くらい ところに あり
ました。

いえの 中には、大ぜいの「子どもの きつねが ま

って いました。子どもの
きつねは、おやぎつねの
もって きた にわとりを
みつけるが 早い~~か~~、

「ぼくんだよう。」

「わたしんだよう。」

と、たいへんな けんかを
はじめました。そして、に

わとりを、すっかり たべて しまったのです。おなか
が 一ぱいになると、きつねの 子どもたちは こぐ
まの みて いる まえで、

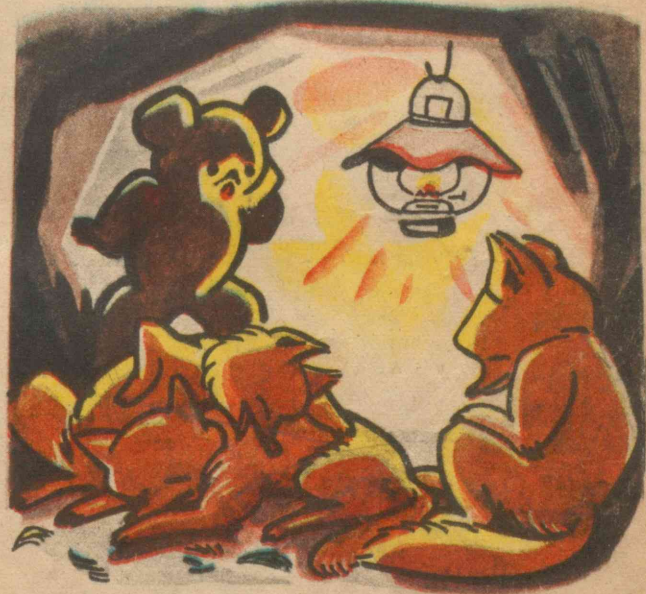
「ぐう ぐう ぐう。」

と、いねむりを 始めました。

なんと まあ、おぎょうぎの わるい 子どもたちで
しょう。

こぐまは かんがえました。

「こんな ところに、いつまでも いたら、たいへんだ。
ぼくも この きつねのような、いじわるで、よくば
りで、おぎょうぎの わるい 子になって しまう。
早く かえろう。」





とつぜん、耳が つんぽにな
 ったかと おもわれるような 大
 きな おとが しました。
 りょうしが こぐまを みつけ
 たのです。そして、よい えもの
 が あったとばかり、てっぽうで
 うったのです。

こぐまは、雪の 上に たおれ

こぐまは、さっさと、きつねの うちを できました。
 そして、もう 一ど 高い ^な ところに あがって、
 「ぼくの おうちは、どこ
 だろうか。早く かえ
 らないと、だんだん お
 日さまも しずみかけて
 いるし、おかあさんだっ
 て、きつと しんぱい
 して、さがして いるだ
 ろう。こまったなあ。」

ずどうん。

とつづやきながら、おうちを さがして いました。



ました。

「あたったな。」

りょうしが、こぐまの

そばへ はしりよろうと

した ときです。

おやっ。

りょうしの 耳に、さく

っ、さくっつと、雪を ふみ

しめて、だれか ちかよって くる 足おどが きこえ

ました。 ふりかえって みると、それは、大きな 大きな



な おかあさんぐまでした。

おかあさんぐまは、さっきか

ら、こぐまを、さがして、や

っつと ここへ きたのです。

りょうしは、いそいで 木

の かげに かくれました。

からだを かがめて、そうっ

と ようすを みて いまし

た。 おかあさんぐまは、こぐまを しっかり だきかか

えて、こぐまの かおに、じぶんの かおを すりよせ



て います。きつと だいじな 子どもが、うたれて
しんだと おもって、ないて いるのでしょう。
その ようすを みた りょうしは、おもわず つぶ
やきました。

「ああ、かわいい そうな ことを した。」

でも、よい あんばいに、こぐまは、りょうしの た
まに あたったのでは なかったのです。

たまの おとに びっくり して、きを うしなっ
たおれた だけで ありました。

しばらく して、こぐまは やつと きが ついて、

目を あけて みました。

「ああ、おかあさん。」

こぐまは、おかあさんを みると、うれしく なって、
おもわず しがみつきました。

「ねえ おかあさん、ぼく びっくり して たおれた
だけさ。おかあさん、ないたり して いや いや。」

「いいよ いいよ。そんなに なみだを ふいて くれ」
なくっても。なみだなんか、もう でなく なったよ。」

こぐまと おかあさんぐまの ようすを さっきから
みて いた りょうしは、なにを おもったのか、てっ



ぼうを さかさに かつぐと、そ
 のまま、だまって、山を おりて
 いきました。
 りょうしも、じぶんの うちに
 まって いる 子どもに 早く
 あいたく なったのでしょう。

こぐまは、おかあさんぐまに、おんぶを して、おう
 ちの ほうへ かえって いきました。

くれがたの 空には、いつの まにか、ほしが 二つ
 三つ でて、おや子の くまを みおくらって いました。



おけいこの てびき

一の まきて、よむ ちからが ついたので、
 二の まきは、おもしろい ぶんを あつめ
 ました。じぶんの ちからで、よく よんで
 ください。

一 くりのみ

(1) やくわりを きめて、たかい こえ
 で よみあいましょう。

(2) □の なかへ じを いれなさい。

(一) くりの □は いがの □□だ。

(二) □の 日は あたたかい。

二 赤い ゆうやけ

(1) 「どんぼは どちらへ いったでしょう。」

(13 ページ) それを、かんがえましょう。

(2) あなたは、この 子どもの した

ことを、どう おもいますか。

三 おと

(1) おと

びあのを ぼろんと ならして、この
 しを いうて みましよう。

(2) お月よ

(一) 「どなたです。」と いう ところは、
 べつな 人が よんで みましよう。

(二) 「月の かげ」と いうのは、「月の
 ひかり」の ことです。そう いう
 ことばが ほかに ありますか。

五 雲に なったら

(1) 雲に なったら、どんな たかい

ところへ あがって いうと、いっ

あい (ません) 11
 あかるい 12
 秋 9
 あけ (て) 17
 あした 46
 あたたかい 9
 あたり 50
 あな 50
 あぶない 34
 雨 14
 いが 4
 いけ 35
 いしゃ 35



あたらしく であ おもな ことば

35 35 4 14 34 50 50 9 46 17 9 12 11

いす 35
 いた 35
 いちば 28
 いと 64
 いねむり 36
 いも 36
 いやだ 31
 いろり 36
 いわ 31
 うしなっ (て) 36
 うた 36
 うたっ (て) 31
 うっ (た) 36

61 44 28 64 36 36 31 36 59 11 35 35 35

えだ 7
 えもの 61
 えん 11
 えんどつ 26
 大きき 37
 おおぜい 11
 おく 49
 おそい 51
 おと 15
 おどり 43
 おなか 58
 おなじ 12
 おぼえ (なさい) 44

44 12 58 43 15 51 49 11 37 26 11 61 7

- て いますか。
- (2) どんな ときに「どっさり」雨を
 ふらして あげますか。
- (3) どんな ときに「すぐ やみます。」
 と いって いますか。
- (4) あなたも、「なにに なったら」と
 いう おはなしを して ごらんなさ
 い。
- 六 ニひきの やぎ
- (1) ニひきの やぎは、はしの まんち
 で、なんと いいあいましたか。
- (2) あなたは、この ニひきの やぎを、
 どう おもいますか。
- 七 いろはあそび
- (1) ろの つくもの、はの つくもの
 などの、ことばあそびを しましょう。

- (2) おもしろい、いろはがるたを つく
 りましょう。
- 八 うさぎ
- (1) やくわりを きめて、あそびましょ
 う。
- (2) ちよ子さんと みつ子さんが おど
 るとき、あきらさんは、なんと うた
 いましたか。
- 九 こぐまの ぼうけん
- (1) あなたは、この おはなしの、どこ
 がすきですか。
- (2) りょうしは、なぜ、てっぼうを さ
 かさにかついで、山を おりたので
 しょう。
- (3) こう いう おはなしを たくさん
 よんだり はなしたり しましょう。

つけ(た) 13
つづい(て) 50
つぼみ 29
つよく 8
てっだっ(て) 38
どけい 38
どっ(て) 46
どっぜん 61
どまっ(て) 10
ながい 37
ながま 13
ながめ(たり) 12
なみ 23
なみだ 65
ならし(ました) 11
にんげん 42

42 11 65 23 12 13 37 10 61 46 38 38 8 29 50 13

ぬれ(ながら) 14
のびる 29
はこ 39
はし 13
はし 32
はなし(て) 13
はなれ(まい) 8
ひらい(た) 37
ひろがっ(て) 12
ふい(て) 49
ふい(て) 49
冬 65
ほし 30
みつけ(て) 10
みまわし(ました) 50
むちゅうに 28

28 50 10 30 49 65 49 12 37 8 13 32 13 39 29 14

むら 14
目あて 21
めずらしい 29
もよう 23
やくそく 8
やすん(て) 10
やみ(ます) 31
ゆうやけ 10
雪 49
ようす 63
よなか 14
よび(ます) 27
りょうし 61
わかっ(た) 43
わけ(て) 57
わたり 32
わるい 59

59 32 57 43 61 27 14 63 49 10 31 10 8 23 29 21 14

かがめ(て) 63
かぞえ(て) 5
かたく 8
かつい(て) 55
かるた 37
かわいい 40
かわいそうな 64
かんがえる 36
きこえ(ました) 55
きつと 27
きもの 49
きらいな 45
くっ 30
雲 26
くれがた 66
くわしく 29

29 66 26 30 45 49 27 55 36 64 40 37 55 8 5 63

けしき 52
こっそりと 10
こと 36
ことば 36
こまっ(た) 60
さがし(に) 49
さみしく 51
さむい 49
しっ(て) 42
しっかり 63
しばらく 55
じょうずな 43
じょうぶな 30
しるし 46
白 21
しん(た) 64

64 21 46 30 43 55 63 42 49 51 49 60 36 36 10 52

しんばい 60
すがた 50
すっかり 58
すん(て) 48
そうつと 63
そば 62
だいじな 58
たいへんな 58
たおれ(ました) 61
谷 52
たに川 32
たへもの 49
たま 64
だまっ(て) 57
ちがよっ(て) 10
ちょうど 11

11 10 57 64 49 32 52 61 58 58 62 63 48 58 50 60

冬 耳 山 月 秋

(49) (41) (26) (17) (9)

早 色 花 白 赤

(50) (41) (29) (21) (10)

高 年 草 青 子

(52) (45) (29) (21) (10)

谷 風 中 雲 空

(52) (49) (32) (26) (12)

立 雪 足 火 雨

(55) (49) (34) (26) (14)

ぶんを つくられた ひと

二 赤い ゆうやけ……………浜田 廣介

三 (一) あと……………与田 準一

三 (二) お月よ……………北原 白秋

六 二ひさの やぎ……………イソップ物語

九 こぐまの ぼうけん……………川崎 大治

ほかの ぶんは、へんしゅうぶと
じどうの もの

えを かかれた ひと

川上四郎・小林和郎・鈴木栄二郎

高橋庸男・伏石繁男・耳野卯三郎

吉沢廉三郎

こくごのほん二(小学校第一学年後期用)

昭和二十三年八月九日印刷

昭和二十三年八月十三日発行

(昭和二十三年八月十五日 文部省検定済)

定価三十四円五十銭

著作者 西原慶一 泉 節二

山下正雄 飛田多喜雄

小山立夫 齋田 喬

発行者 東京都北区稻付町一丁目二三番地

二葉図書株式会社

代表者 大野 治輔

印刷者 東京都北区稻付町一丁目二〇八番地

二葉印刷株式会社

代表者 大野 治輔

発行所 東京都北区稻付町一丁目二三番地
二葉図書株式会社

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE MAY 11, 1949)



なまえ
あかさか
いっし